

■ 解答・解説

問1 ア (訪ね歩いて中へ入る)。「尋ね入る」は「尋ぬ (訪ねて行く・探し求める)」 + 「入る (中へ入る)」の複合語。山里の奥へ分け入っていく場面である。

問2 訳：(人が) ひっそりと住みなしている (住みこなしている) 庵がある。「なし」は動詞「なす」で、「(ある状態を) 作りあげる・～のようにして暮らす」の意。「住みなす」で「(自分の住まいとして) 落ち着いて住む・住みこなす」を表す。

問3 訳：木の葉に埋もれている懸樋の (滴り落ちる) 雫の音のほかには、まったく音を立てるものがない。「つゆ……なし」は「まったく (少しも) ……ない」という呼応 (陳述) の副詞表現。

問4 「ならでは」は、断定の助動詞「なり」の未然形「なら」 + 打消の接続助詞「で」 + 係助詞「は」。「～でなくては・～以外には (ない)」という意味で、下の打消「なし」と呼応し、限定 (それ以外にはない) を表す。

問5 音を立てる・物音がするの意。「おとなふ」は「音」 + 「なふ」で、「訪れる」の意もあるが、ここでは懸樋の雫の音以外に「音を立てるものがない」 = 静寂を表す。

問6 ア (それでもやはり)。古語「さすがに」は「そうはいつでもやはり・なんといつでもやはり」の意。ここは「(人けがないようできて) それでもやはり、住む人がいるからなのだろう」という文脈。現代語の「さすがに (評判どおり立派に・予想どおり)」とは意味が異なる点に注意。

問7 訳：(菊や紅葉が散らしてあるのは、) 住む人がいるからなのだろう。「なる」 = 断定の助動詞「なり」の連体形、「べし」 = 推量の助動詞「べし」の終止形 (ここでは推量・当然の意で「～のであろう」)。

問8 訳：(こんな寂しい所でも、住む人は) このようにして暮らしていただけるものだなあ。主語は「(庵に) 住む人」。「よ」は詠嘆の間投助詞。

問9 可能の助動詞「らる」。「かくても (このような暮らしぶりでも) 住んでいられる (暮らしていける) ものだなあ」と、可能の意で訳す。(自発と解す説もあるが、「こんな環境でも暮らしていける」という文脈から可能ととるのが一般的。)

問10 理由：山深い苔の細道の奥に、懸樋の雫の音のほかは物音もしないひっそりとした庵があり、しかも閑伽棚に菊や紅葉が供えてあって、俗世を離れてつましく住む人の心ばえが感じられたから。ここでの「あはれ」は、しみじみと心を動かされる感動・趣深さに打たれる気持ちを表す。

問11 ここでの「きびしく」は嚴重に・いかめしく (しっかりと) の意で、柑子の木のまわりを嚴重に囲ってある様子を表す。現代語の「厳しい (つらい・容赦ない)」とは異なり、「程度がはなはだしい・嚴重だ」の意である。

問12 係りの助詞 = 「こそ」、結びの語 = 「しか」 (過去の助動詞「き」の已然形)。「こそ」は文末を已然形で結ぶ係助詞であるため、結びの「き」が已然形「しか」となっている。

問13 意味：興ざめして・興がさめて。終止形は「ことさむ」（下二段活用）。「こと（殊・事）」＋「さむ（冷む・覚む）」で、それまでの趣・感興がさめることを表す。

問14 訳：この（柑子の）木がなかったらなあ（なければよかったのに）。豊かに実った柑子の木を嚴重に囲っている様子に俗っぽさを感じ、「この木さえなかったら（よかったのに）」と思ったのである。

問15 (1) 反実仮想。「(事実に反することを) もし～だったら…だろうに」と仮定する表現で、「(未然形) + ましかば、…まし」の形をとる。

(2) 省略された「…まし」を補うと「この木なからましかば（、いかにここはよからまし／さらにははれならまし）」のような内容になる。すなわち「もしこの柑子の木がなかったら、(この庵はもっと趣深く、申し分なかった) だろうに」という意味。事実は「木がある」ので興がそがれた、という反実仮想である。

問16 (1) 過去の助動詞「き」の已然形。「き」の活用＝せ／○／き／し／しか／○)

(2) 直前に係りの助詞「こそ」があるため、係り結びの法則により文末（結び）が已然形になっている。

問17 例：豊かに実った柑子の木を嚴重に囲い、執着・俗気が感じられたから。(庵の閑寂さにそぐわない世俗的な所有欲が見えたため。)

問18 イ。俗世の欲や作為を感じさせず、ひっそりと閑寂であることにこそ趣を見いだす美意識である。柑子を嚴重に囲う姿に「執着」という俗気を見て興ざめした点が、その裏返しになっている。

問19 柑子の木そのものは自然の風物として趣を損なわない。しかし、その実を取られまいと「きびしく囲ふ」点に、住人の所有欲・俗世への執着が透けて見える。閑寂で無欲なたたずまいにこそ趣を感じていた作者にとって、その俗気が興をそいだのである。(＝作者は「無欲・閑寂」を尊ぶ価値観をもっていた。)

問20 (1) 兼好（兼好法師／吉田兼好・卜部兼好） (2) 鎌倉時代（末期） (3) 随筆

問21 平安時代の作品名＝『枕草子』、作者名＝清少納言。(『方丈記』〈鴨長明・鎌倉時代〉とあわせて「三大随筆」と呼ばれる。)

問22 ア・イ・オ。

ア＝「栗栖野といふ所を過ぎて……尋ね入ること侍りし」に合致。イ＝「懸樋の雫ならでは、つゆおとなふものなし」に合致。オ＝柑子の木を見て「ことさめ」るまでは「あはれに見」ていたので合致。

ウ＝闕伽棚に花などがあるのを見て、むしろ「住む人がいるのだろう」と判断しているので不適。エ＝はじめは「あはれ」に見ていて、柑子の木で興ざめしたので「はじめから失望」は不適。
